

## 1. 問題と研究目的

人は、生きてから死ぬまで、必ず誰かと関わって生きていく。人間関係を構築することは、避けて通れるものではない。しかし、近年では、ネットが主流となり、人間関係が掴みにくい。人間関係の築き方が困難になっている今日、人はどのような方法で、誰かとつながろうとするのだろうか。

人間関係は、発達段階によって、異なってくる。中学生は、一人にならないために、学校での居場所の確保が重要であり、「一緒にいる」という表面的な友人関係を重視している。しかし、高校生になると、他者を入れない固い絆をつくり、友人関係が深くなっていく。

青年期は、周りの大人の生活や規範に疑問を持ち始め、自分らしさを模索する時期である。そこでは、悩みを打ち明け、語り合う同世代の友人が必要になってくる。そこで、青年期の友人関係の中で、“グループ化”に注目した。グループの意味として、第1に、社会に出る準備期間として、対人スキルなどを学ぶこと、第2に“居場所”としての役割があることが言える。とりわけ、友達との関わりを重視する女子にとっては、“居場所”としてのグループが、必要不可欠になってくるのではないだろうか。また、人間関係の築き方は、女子と男子で異なってくる。女子には、自己開示や親密さを重視した交流、共有を中心とした活動や会話が多という特徴がある (Buhrmester, 1996)。また、女子は男子より、頻繁に連絡を取る (Belle, 1989)。さらに、女子は親密さを「話題や会話の量」によって定義する傾向があることが明らかになっていることから (榎本, 2000)、女子は、男子に比べて、会話の量や話される内容によって、親密さを見ていると考えられる。つまり、女子のグループ化と会話活動が大きく関連しているようである。そこで、本研究では、日常会話の中でも、よく話されている“うわさ”を取り扱うことにした。

青年期の女子のうわさには、どのような内容や役割があるのだろうか。うわさは、友人関係を形成・維持していく上で、何かしらの影響を与えていると考える。さらに、中学校と高校で発達段階が違い、友人とのつきあい方も変化していることから、発達段階の差によって、うわさされる内容や伝達方法にも何らかの差が生じるのではないかと考える。この点に注目して、(1) 青年期女子のうわさの実態を明らかにする。(2) 女子の友人関係を維持する上で、うわさがどのように関係しているのか「うわさの観点」を明らかにする。(3) 「発達段階」でうわさについて差がみられるのか明らかにする。

## 2. 調査方法

対象者：兵庫教育大学に通う6名。(2年生2名、4年生4名。)

調査期間：2012年3月～11月

調査内容：筆者自身と調査協力者2名で“座談会”という形でインタビューを実施した。インタビューは自由に発言していく形式で行い、出来るだけ多くの話をしてもらったようにした。

インタビュー内容：インタビュー時には、うわさに関する話を含め、学校生活や対人関係、友人関係に関する事など、うわさに関係のないと思われるものも全て話してもらった。

分析手続き：インタビュー終了後、ICレコーダーで録音された内容を全て文字起こした。そして、インタビューの内容をもとに分類を行った。意味的なカテゴリーを作り、構成させた。その際に、3組のインタビュー全てを混同して、KJ法で分類した。

## 3. 結果

インタビュー内容をKJ法で分類し、女子の高校生・中学生のうわさがどのようなものであるかについてみたところ、“うわさの内容”“方法”“うわさの特徴”“うわさへの関わり方”“うわさによる影響”に関する5つのカテゴリーを得た。“うわさの内容”については、《恋愛に関すること》《部活に関すること》《外見・性格に関すること》《行動に関すること》《その他》の5つに分けられた。“方法”については、《ネット系》《交換ノート》《人伝え》の3つに分けられた。ネットのうわさが多いのは、手軽・匿名性・自分に被害がないから

だと分かった。“うわさの特徴”については、《うわさの性質》《うわさの生成過程》《うわさの印象》の3つに分けられた。少しのことで、話題としてうわさを流し、話をつなぐために利用したり、盛ったり、尾ひれをつけてしまうことが分かった。“うわさへの関わり方”については、《加担者》《傍観者》の2つに分けられた。加担者は、友達にうわさを話そうとするが、傍観者は、冷静にうわさを評価できることが分かった。“うわさによる影響”については、《うわさの直接的な影響》《うわさから発展する被害》《うわさのさらなる発展》の3つに分けられた。これは、《うわさへの関わり方》と関連しており、うわさされている本人が、うわさによって、勝手なイメージを作られ、それが、新しいうわさとなって広げられていくことが分かった。

また、インタビューを行った際に‘女子のグループ’について、直接的に述べられた。そこで、上記と同様に分類して、4つのカテゴリーを得た。《グループの上下について》に関しては、青年女子が、‘グループ’の上下を気にしており、どちらのグループに所属するかが重要になってくることがわかった。また、うわさを勝手に流すのは上のグループだということも分かった。《グループの人数について》に関しては、大人数のグループでは、その中で、少人数にわかれることがわかった。その際、少ない人数の方に入った子の中には、「嫌だ。」と思う子もいた。《グループに入るための道具について》に関しては、うわさをする中で、自分が友達と会話を楽しむことができ、さらには、話で、その場を盛り上げる‘ムードメーカー’として注目してもらえることが分かった。また、自分が友達とつながるために、うわさを利用していることも分かった。《グループの構成過程について》に関しては、秘密を共有する人を限定することによって、‘閉鎖性’が生じることが伺えた。

うわさ・グループについて、中学校と高校で差があることがわかった。《恋愛》については、「妊娠している・やっらしい」から「付き合った・別れた」と現実味のある話へ変化していることがわかった。《方法》については、高校の方が、ネットのうわさがひどかったことが分かった。《うわさの特徴》については、中学校の方が、うわさの期間が短く、「次の話題、次の話題」というイメージがあり、1つのうわさが流れると、1000くらいのうわさが流れていくことが分かった。一方、高校では、1つのうわさを深く掘り進めている。伝わる内容が、‘広く浅いもの’から‘狭く深いもの’へ変わることが分かった。また、《うわさの対象者》についても、中学校の時は、同級生なら誰もがうわさの対象者であったが、高校になると、自分の周りの人や、関わりのある人のうわさに対してのうわさしなくなるということが分かった。これについても、広い対象範囲が、狭くなっている。《うわさによる影響》については、中学校と高校では‘うわさが流れた後の友人関係’に差があることが分かった。《グループに入るための道具について》に関して、中学生は、自分を守ったり、誰かを貶めたりするためにうわさを利用し、そのために必死で情報を集めるが、高校生になると周りの子や、自分と関わりのある子のうわさに反応することが分かった。

#### 4. 総合考察

女子の友人関係を維持するうえで、うわさが、話題内容として、友達をつなぐための‘道具的役割’になっていることが明らかになった。うわさをする中で、友達と会話を楽しめる。それによって、場を盛り上げることができ、グループでの自分の位置を確保できる。また、話をつなぐことで、会話の量が増し、親密さも深くなり、自分の居場所を確認することも出来る。つまり、女子がグループを維持するうえで、うわさというものが大きな役割を果たしているようであった。そして、発達段階では、“うわさの内容”，“方法”，“うわさの特徴”，“うわさによる影響”の4つの観点で差が見られた。その中でも、友達とのつきあう姿勢・範囲などが、‘浅く広く’から‘深く狭く’なっていく発達段階の特徴に伴って、うわさの内容や特徴も、‘浅く広く’から‘深く狭く’に変化していくことが明らかになった。

[主要参考文献]

榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.

榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.